



サンダ対
ガイラの
道

川崎ゆきお

「町内を自転車で走っていたのですがな」

「散歩の話ですか」

「いやいや、大した散歩じゃない。いつもの道を走っていたのですが、少し暑くなってきましたなあ。春とはいえ肌寒い日があるので、厚着をしていたんですよ。それで日陰になっている通りに入ろうと、枝道に入りました」

「そこで何かが起こったか、おやっと思う光景をご覧になられたのですね」

「ご覧になっておりません」

「ああ、そうですか、続けてください」

「非常に細い道なのですが、人が結構歩いておる。しかも団体でな。よく見なくても分かることだが、下校中の中学生だと思う。いや、高校生かもしれん。いや、中学生だ。この近くに確か中学校が出来ておった。だから、中学生だな。歩いておるのは」

「はい」

「ここまでで、どういう話だか分かりますかな」

「いえ、分かりませんから、続けてください」

「狭いでしょ。しかも三人並べると、壁ですなあ。近付くと、すーと壁が割れまして、通れたのですが、その割れ目を見ていると、なんだか懐かしいような気がしてきました。結構緑が豊かでしてなあ。あれは庭木だろうけど、春になって葉が出てきたのでしょ。風景が濃かった。その通りはきっと昔のあぜ道ですなあ。曲がりくねっていますので、真正面は塀や庭木なんです。狭苦しいところに、いろいろ生えている。家もこじんまりとしていましてねえ。その細い通路のようなところの先に、学校があるんだろうけど、これは通学路というより、抜け道のような、間道のようなものじゃないかと思いました」

「はい」

「ここです。ここからが本題です」

「あ、はい」

「思い出しました。急にね」

「何を」

「昔、通っていた高校の通学路ですよ。いや、ここと同じで、道と言えりようなものじゃない。間道だねえ。それに近いところを、昔、私は歩いていた。それを思い出した」

「はい、ありがとうございました」

「いやいや、話はまだある」

「それだけのことでしょ」

「そうだけど、感慨というのがある」

「はい」

「その高校はねえ、郊外のだだっ広い所にあった。ベッドタウンだろうねえ。土地が広い。私は一時間半かけて電車で毎日通ったよ。私立高校で近所の生徒など 殆どいない。皆遠くから通っておる。頭の悪い子でも入れる高校でね。その中でも特に学費が安い。通学費を使ってもね」

「高校の話ですか」

「最寄り駅がある。二つね。北と南だ。私は南から来るので、南側の駅を使っていた。当然だね。徒歩距離的には二十分ほどかかる」

「はい」

「高校の終わり頃、私は北側の駅から帰ることが多くなった。来るときは南側の駅だけだね。それに定期は南側までなので、北側から乗ると、切符を買わないといけない。それでも、たまにその道を使った」

「彼女ですか」

「いや、男子校だし、近くに女子校もない。不思議と気の合った同級生が北側から乗り降りするので、それに付き合った感じだよ」

「親友ですね」

「いや、特に仲がよいわけじゃない。同じクラスだが、彼はいつも一人で帰っておった。私もそうだ。まあ、誰かと道ずれになって群れて帰ることは、殆どない。頭の悪い生徒ばかりだから、リーダー格が少ないのだろうねえ。だから、グループも出来なかった」

「はい」

「そのとき通ったのが、細い間道でね。農家の横をすり抜けるように通っているだよ。夏などは涼しい。車は入ってこないし、寄り道も楽しい。川が近くてね。その土手にカボチャがなっているんだ。夏は、これをつぶして遊んだよ。スイカ割りじゃなく、カボチャ割りだ。誰かが栽培している物じゃない。土手カボチャだ」

「長い話です」

「古い話さ。遠い話なんだよ」

「はい」

「その、何だった、中学だ。自転車で走っているとき、その下校生を見ていて、それを思い出した次第さ」

「それだけのことですね」

「その同級生とは卒業して、それっきりだ。相性がいいっていうか、妙な話にも乗ってきてくれた」

「たとえば」

「少林寺拳法と空手とではどちらが強いとか、円盤は本当に飛んでいるか、とか。サンダとガイラとではどちらが好きだとか。これは究極の選択でねえ」

「何ですか、それ」

「フランケンシュタインの怪獣だよ。人間を大きくした怪獣。映画だけだね」

「ああ」

「豊登とサンダー杉山、どちらが強いとか」

「ああ、もう分かりません。プロレスですか」

「そうだ。そういう話をしながら、村の裏道を歩いた。あれは良かったよ」

「はい」

「今も、彼と会うことが出来たらどうなんだろうねえ。まだそんな話に乗ってくれるだろうか」

ねえ」

「さあ」

「しかし、君、ただ聞いているだけじゃ、つまらんでしょ」

「はい」

「話している方も、せいがいい」

「はい、失礼しました」

了